

4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2

司井上通東武銀行  
帰家日記

金

卷之二

老村故老

卷之三

文庫

京極家 藩中好某 諱刈之臣井上儀左衛門其女  
丸龜侯 同氏通子之道代記也後同家三兩代左衛門之嫁

天和元年十一月奉  
君命赴東武紀行

天和元年十一月奉  
君命赴東武紀行

かの御子をもひあへて漬け　かの御子をも  
やれあらも君人の事　あれ  
時あはりもて退らせざるありてても只  
さうの財すゝまき率てよしゆく日もたゞきとソシテモ  
今行そばむひゆどて、うりあつてぬるの所の  
ももろそらへんあらわす  
乗寒一葉浮修忽過佗兀風蠶蟹鄉夢  
波聲動旅愁蒼天鴻水浩月如流  
枕袖蓬蘽裏不堪唯自差  
六言庚とあくま附より経緯所はとゑとゑの申つて  
母よりえりあふてみ家にやれゆきとおひくのむを  
きほどのうきもとやはのせめ教役アヤハタナリ  
トたもじれとぞうてのやうのてやうとね君の背と  
あつきて父のものあらぐの対をかゝりとて朱りて  
りと父とまのきあらきとれ用つてかくまえ

まくらふをあつて、まづはむとすまくの事もたむ  
十六年のこと、收取の事のみ風烈として承りと  
そくせき、近間とあわてて行舟を遣へ、まよ開を  
まよひの舟渡うつて玉のめに見ゆるゆけ  
あひ  
因縁、自力、力あらず、まづはまづけて所の立場を有げ  
りて未の内からてむちの隣となりて居すぬ  
十七日卯なき日、むろとひそむてゆりて一年の初  
まの月とす。因縁はまづありて、やうやく、家ともの  
のうちもつるまきに因すれども、ゆくゆく、隣の  
浦しええにうちられし  
やらひ、まきて、所の浦の庫は、よせてことをゆす  
松の木とさく、雨の五郎の君のひきこもらうと、おけある  
ゆき、ゆり  
翠の木とねまくら、ゆきの木とねとひきこもる  
ゆ」とともくら風毛と、やうすみのまきのり氣い」

宿在すがよきとあらへや二重の原町ともか  
やどくぬてまほく、中庭のあわらをゆまへてうやくや  
お草木のあらへのやとはててる人あるものより  
またれまほくの者も人をきそれ朱りてかはす  
あくまくいとまく、予也とまくのやうに行まくわ  
かしむよるのゆきよるのれいかく旅りてまく  
うるのとまく、まくけむひくとくとてらむすそ  
さきしてまくわくひくはむてしとくとくわくほ  
る歌  
せ二日朝うけ、東山とまくわく  
後てり、草はとまく、まくとくや里の多くもつ  
まくの旅むとまくわく、あく夜の事とまくの  
よ

鶴鳴巖店促行裝殘月含寒映曉霜長  
路漫漫何日盡朝朝暮暮是他的鄉

旅衣か 井の里か 五つと  
身 紹 萬里走君命 今日已來荒井闢未識 少長因袖  
分 空留旅館我心難

身經萬里走君命今日已來荒井闕未識少長因袖  
分空留旅館我心難

旅衣か 井の里か 五つと  
身 紹 萬里走君命 今日已來荒井闢未識 少長因袖  
分 空留旅館我心難

方へ引けたまゝ、左へまわり、右へまわるも  
一歩も歩きやせぬ。身もよし、心もよし、脚  
もよし、ありて、あらゆる事より、かく  
かともし、ござります。多く、見る事より、  
はれ、をうて、渾身と、躊躇へ、いたる事も、  
多く、見る事より、身の力、ござります。  
嘆うて、嘆人の、じめあれども、かきとよひ色、  
みつゝ、呻く、うつむく、かきとよひ色、  
はげても、其の、あらた、もと、そよぎ、  
も、紅葉と、西宮も、すいづれ、朝日と、の、もと、  
ち、不思議の、二日月の、と、ま、時々、あきやる、日の  
刻、さう、さう、さう、さう、さう、  
を、さう、さう、さう、さう、さう、  
を、さう、さう、さう、さう、さう、  
を、さう、さう、さう、さう、さう、  
を、さう、さう、さう、さう、さう、

あれから今更にやうやくあつたひま  
をもとめられば空のあしかれへる  
まほいとよきはびとすい事のふか  
多花といまきわちよしの船のゆみ風め  
あれもちつきてうるわのむらをぬうわをそ  
こひはそだくこまくみるをわかのニシソウは  
ほのまちとくあく  
ハナと神のゆそともまち津こまくそまくのそ  
の室あむ郷の神とゆ草たまむ旅の着かえーとつま  
とくすりのひくじ  
四日咲ひやまくらむくわくわく  
ふくまやみくらむくわくわく  
きりぬ

爲慰家親東武之制衣件書記呈等處貯藏三換井上氏通  
達嚴君之明訓居茲閨闥之幽而詩書典四德經內則習和柔哀  
祀鶴晨於殷喜開雎于周遍看古昔之傳心與列女同溫故寧  
不能及希攸身寧物尤書中不遠萬里眼前忽到參列見彼敬  
善于魯謁此孟母於周求女師其未少古人德以迄今履霜以思致冰  
抱是寒木之心服節儉不暇飾何治容而致遙向窓下而紡績燒膏  
油而執針此少勤不足苦恠惜身不如禽只徒飽食溫衣無成送光  
陰枯囊觀鍼口戒裹驕鑄女史歲鳴呴人承志之堅不可以貪富侵  
雨露濕制春服西風未催秋砧樂只有二親在兼教何為不力家尊之  
嚴且慈母氏之慈而則惠予以義我方愛放予以正法式合余得窺古賢  
使余無姑息知女子之多慎識事之在蠹繕繩安閨中志在內不除而樂  
草色身自不出戶庭言則不出於國精神肅而以用四辨靜而端  
直恐日月之往真無業之供于暨願守身無詭罹永思而以抑久

深閨鉛筆序

夫女子之為道也乃日于閨門之内無非無儀柔順以為德而行必  
信矣酒食衣服是議而無有外事若其反之者比違天道之常禮

乱至焉故姬姒順德而周室百内助之功呂后專政而終亡其族樊  
姬攸身而莊王改過驪姬作詐謀而國不安趙姬事叔隗而子孫  
秉祚夏姬淫放子傾國因此觀之治亂豈不閑婦人哉予終日在深  
閨厓見諸史鑑廿圖而善者師之非者戒之尚政過此克其終故舊  
志述拙以啓古

銘曰

閨室幽寂う詩書伴我 師聖友賢う身體是安  
跡部民部少輔厥よりあすまく水波の石山へ布る柳とが畫師  
侍郎言法の絶え儀の彦とをのぞむかやくゆか仲となりつゝ  
ゆきアリハハラクシカセモニ夜一々

才閨房秀名古今聞湖水漂筆石山助文近來雪姬丹青出群  
圖之畫之流芳方傳芬

右の筆ナリムシヨウリウムサセニシ施ミトトヒル也

貞享二季三月扈從於染井賄即景

二君邂逅共怡々終日逸遊春色遲櫻洗紅顏過雨曉柳梳綠髮得

風時林間娛聽花枝鳥池上嘲看蓮葉龜志意漾々迷羨景年々歲々

永如斯

讀孟子浩然氣

分明浩然氣至天塞乾坤將師正嚴令卒徒從教言一心清若水四  
眸直如蒲道義為常食全身可養存

其ものとくにじくせんじくらむとあはれ

夙覺此身如夢幻世間生死不關心麻衣草坐羨君德書九詩裏聽我吟

立春祝詞

松色秀千歲梅香傳萬春南山詩可賄今日祝君辰

傳は色あひて偏私と拂へて後をもひれくよめり  
幸いひそあふとせとくのあまのむらみしたのまみ

洋家の日記

が暮の山裏へまづて此をせむらむ即興  
も似て山風へとひそむふくらむる山跡も  
あつてまづて多くてたゞみをまづては  
るかとやうてア（あれ）らまづては  
はきのはう（内）（外）とおつて（と）おのけあ  
靈魂何處去遊行即見蒼鵲傍景塔上  
空留清淚石碑前

さうと仰神の事もあらかじめ思ひ  
仰る所の事もあらかじめ思ひ  
さうと仰る所の事もあらかじめ思ひ  
とさうと仰る所の事もあらかじめ思ひ  
されどうとさうとあらかじめ思ひ

恩情何復九年  
別恨難消  
海月前相望淚痕新



ある、また地へある、うけられたのを了りてはのよせうる  
かと、徳へおひたされて、立ち上りぬ。おちぬる、家の  
まゝ、うちへも、志とけらを尋ね、十郎、はゆく席とぞ、  
たゞよしと通ひあひゆかともとす、このあづります  
ある、ひきつゝ

大礫歌舞地昔日各爭妍虎媛其殊絕十郎也偏憐隨樓  
觀石氏享席殆和田不是時宗至使讌獨戴天  
タラカニテ佐川トワリイモリムヘリ水ますらアヌキモキシカス  
人あリトヨモウアリテモリカヌキトシハシモロコシモカ内  
事モ有リのサレバ朴良使モ一ノモヤハルミノ  
十二月ノシハモニテ山波ウルヒトカニマツモモヒトコメテ  
キモハ松毛モのれモハシモトシシタシタモタモタモタモ  
岩根山ニシムシカタモタモタモタモタモタモタモタモタモ  
チカタモタモタモタモタモタモタモタモタモタモタモタモ  
チカタモタモタモタモタモタモタモタモタモタモタモタモ  
音モ立カニシカタモタモタモタモタモタモタモタモタモタモ  
岩根山四ツ木の御スナギスナギスナギスナギスナギスナギ

箱根山上幾峰嶽古木回巖雲霧生地利自然如設險人瞻君德共和平

山のえほと水船のかくま  
あらゆるとさへはの  
流れよいとすまく見  
れ、  
山かとぞひよりても思ひよとせ  
人のことわき  
山かうきはのとらうと山か、世  
に、若狭道とくや  
あい今、橋舟、をもむちすのこ

又あめく様の實と云ふ松の風、白雲、壁をトスや  
石を打たリテや壁を立ヒテ言ひのあつてよかトヒムヘ  
テシマツの立木わからぬれ水の不そとの海をシロヌモ  
ちひアキ塔のうちト竹を立ヒテ金山かと聞ク事有リ也  
さうらうアキモセヒトヨリ<sup>レ</sup> 管領<sup>トシマシ</sup>トシシのあらうモ門下  
並平りて、<sup>レ</sup> て則ト萬國<sup>ミヤコ</sup>をもむる在唐<sup>トシマシ</sup>トシシの  
ゑくとも、齋もひのいへトセレヒミタハ、老もせよハ  
セモワキトモもあひやウカニキトモアヒシ  
つ皆のと<sup>レ</sup> す。行もとらるゝ聲<sup>シテ</sup>モ元<sup>モ</sup>居<sup>リ</sup>人<sup>ノ</sup>全  
老も<sup>シ</sup>ま<sup>レ</sup> そし年<sup>シ</sup>即<sup>シ</sup>キ<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup> あ<sup>シ</sup>前<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup> と<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>  
通<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、う<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>了<sup>シ</sup>  
が<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>、お<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、け<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>川<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>  
地<sup>シ</sup>つ<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、あ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>了<sup>シ</sup>  
り<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>せ<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>ナ<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、故<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>了<sup>シ</sup>  
事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>

二月ハ源氏と申る  
十四日也。やまとソの家々の聽人の納入行方。也。  
其のうちひ送る者、らむものいもへ立てぬり。猶  
意もさむの。立てぬる。

山の事は夏の事山の事はうらは朝風を一ほまつ  
江戸とゆきうりあくとゆくぬ。のち根の木とゆく  
あくいのき山の事うの遙とゆくとゆくありうてあい  
むくらむくらの事あくらうてあくらうてあくらうて  
りくらうてあくらうてあくらうてあくらうてあくらうて  
人の事ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく  
いつくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく  
仰見士峯高倚天雲端玉立徳容鮮千秋雪色映東海  
一株之讓凌前神秀宣爭他列嶽仙蹤獨在我危巔  
鄉人若向途中車好れば是山比聖賢

卷之三

あさしむ座すゝる薙はれとて川のゆゑに  
山とて

あつ夜かくまくはくをとひかうき  
まうこのゆきよもじの山の行きとち  
りひるまど

右の歌代善や西原三郎の山から  
すずめはつてゆるはるかにゆくのあ

紫の山林、その見事な木々の  
群衆の深吸きとて、そぞろの  
香りが年々一歩も

ももかへる事無と云ひてゐたのと似て  
さういふ事もいふこと、とよはれぬ風の甘くとうふを  
うめぬ姑の姫君もあひゆくからまうる年々の事  
はまひうるよりうちもうれりめでて年々の事  
大井川もさうのけ頃はああせ石もくほ原のゝ背  
つまてるとちく見えあまつこうの巻あくまぬキラマシ  
川もあくまぬキラマシとすましめの時の花が  
匂ひもいとひきわたり園をうらむてむひのすうきぬ  
あみの名前はいとち井川この由やアラモト有  
ちがひ日てうといとあアアラモトの、うらむせうとくえわ  
せううらむくわ

やくはり月のて有とよゆゑのま  
ニヨリキテ、やとる日又入ぬか。あれ、あ  
して山下のえにせ、白い山下。  
もかくのをあわれう。ほあるまの方こうも

古事記傳  
人間の物語  
経年一矢の付

いとまことに身じて此の仕事の氣を失  
あらわすが、いはゆる「官の筋」もこの身の筋  
くそ暮れの、清めぬむ所れ、取てすましる  
うて、いはる「正」あれ、ゆきをりて、まことて、わよ  
とひて、こせらるるも、の下へ、面白いゆく、窓のま  
すみおほれ、そのひづき、まとて、こめり  
て、あしはまぢて、青色の、ひじり、いとくさひをす  
涼やわぬの、すて、むれ、すり、うき、うき、半蔀、すて、と  
まじて、みまき、とお、ほや、いはき、ね、あらはまく、さく  
うて、うるある翁と、かぎ、をうれ、とて、あても、おの身

十六日まことに、弟の手紙をうけた。おひ流り  
あら也佐和のゆふかせて、之の事あつて、いひとく  
さうもあせられつかひ——地代もあつて、

テアカはとくらつての十日をくぐるの日には、アカニ  
日のはじめに、室とあへて、テアヒ古ノミコトを祭り  
す。またやうやく、アカヒ古ノミコトの御子の、アカニ  
アカヒ古ノミコトが、神のもの、お村みたまぬを生てある  
ト。高もアカヒ古ノミコトの御子。

あまやかす神とおもひぬ  
有らむるに山と山をのむへ  
うそやあせりアリとの里のあはれ  
往くも経き候ゆめ山  
往くも経き候ゆめ山  
西との筋とあはれ  
白考半蔵  
さわりし形の大手の脚門  
このふのる、なまの汗味の筋筋  
こちまでアシモウキのあひはね  
ひよとモウヒシテモウタニ  
黒毛の毛それの毛とモウヒシテモウタニ  
モウヒシテモウタニ

天龍河上天龍去竜去河留ニ水流ニ水中方成大小  
小斯揚鷺大斯舟

まけいや、まの葉ちのいり  
せよまへあれ、あつまの葉のまはくとてゆる  
せよほりてはくやとくの  
ほぢの、みとくとくとくか  
きとくす。のるのえぬ、せよくらうすよ  
十七日めをす。神をあうとく。第十七日あうとく  
のくとくのゆくゆくはく。夜の  
ほくまくはまとももあ  
例のせよ。されどくせりかもせん。すとくやく  
けとく。並木、姓をす。はむとう。草の年て西  
ゆりうはるのゆくゆくす。移もかく。わ  
たすく。使れ。山もとゆく。まゆく。う  
ち。山たく。風のちくのまく。はるのそく。絶々  
うねうね。あきとさく。むし。山政。ひく。ひく。夜と明り  
うとうあく。ゆふ。うり。うそ。あま。うそ。うそ。うそ。  
いのく。お。やそじ。わタ川。とを。の。お。店とそ

向鄭子共言有酒有嘉者

かくもひのき生すとゆへて人ぬりて已  
キの育つまくわく葉をかむるやゑ  
め波よれをちの五古ともくの  
うちをすりぬるもあくはくとゆて部へるもす  
とよとよらかくもよだかとそのかくよびくにせん  
の草木かくはくをまのけんとひらすりの秋の雲  
うきうきとくの風の音かくとくとくの音かく

多くちやうのむりやうはう孫毛と其誦トモははくら當年  
の頃もさうぬくして書かれてこそて此の心とぞあ  
とする人のきくとく諭めりが有諭あれハ後世毛の事アリモ  
そよがひすりやうがしらうや、あとてつうじの毛もほとく時と  
つもそれハ記の

大公例の御身の歴史とソツモのゆゑも多病と可ひゆういち  
川口の嘗の名と耳にうちて是がソレハ主の即位の日也  
又あ碌幸をつけて所として御居あまのともい画とも  
すもりし人多自らひらかへるのをせりとまくとぞ  
くわいへきわくわくとぞくよ年し、物語ひとき

まよひのあはれに向ひ、移る秋の香をとひて  
ば蟹脚とく写す。  
宿題の見事な、旅のこもる筆の跡風。  
ひきひづり、うらやまゆるものあざむく。  
ぬる水又うきよる。(さかとひのくわらをうな)

「あれもほどもよき事海のまことの如きをうかが  
えあらぬのあれ逆旅（おとづれ）小口やうのものりをまこと

木日は朝と夕暮の村の所とて  
石井山の下に立  
ちゆかくまつてゐるなりあす  
とてたててたててたててたてて  
ちゆかくまつてたててたててたてて  
まつてたててたててたててたててたてて  
まつてたててたててたててたててたててたてて

人生何事多寥落千里  
近來經鎔鹿思蹉跎

ま、車へ行  
る。中頃伍波半蔵門四、ゆきぬとて野  
主半蔵の車へと仰せられ、そはも  
のぞみたす。年弱のうえに、  
の御めぬれか。おもてはる所、右の内には、  
おづの江室のゆきと、こくをかひらとおのづやけの  
木、タリ、さすのゆき、いそぎて、おもてはる所、

勢多橋上輿簾裡  
紫式部名高且遠

勦多橋上輿簾裡  
紫衣部名高且遠  
殘峯秋月浮花洛

龜見石山思故人  
光源氏詔麗還新  
巡麓江湖通大津  
空心對此先置鹿

せの處とさへ石や瓦の處とあまいゆうの  
行く處のやのむすびてやと筆れ山よりゆきりや  
ありまへとおきゆのとおれはなるのこくとおまかれてや  
御氣と二をひととせゆん所へうるゝとおもひ  
正やのやとあまへとおまかれてや

石山のあきづかくわれてはれし日とまへる所  
重きの事もや耳へ、あらの美神のう色あんむくとまへ  
いゆゑて、井、源とて松一寸とえあらどもの、ひるまてをとて、  
そそがれしのの、ゆきすく、一君とてよて、  
きそくがむつあはる、たはくさきをひえの、あらあ  
三井寺も寺へめりて、めうととお詔下すや、御のまへる  
ちもゆいとくもく、、ゆくとくや、あれをうみまことむらくす

きやく水のあぢちとをもすかはまくひそめえ  
西風と東洋とをさうめの新風とて、時流の  
すの月夜はおもての夜とがひやうて、又あれの聲  
ひたまのすと、遙れ、莫由々アミナトと音もせず、以  
てはよし依々とる往來事形とて、家  
ものやどと事のへて、もと東人をほりはなせをみ  
ゆきとす事われ、至る下せどもかくほり事わ  
きゆゑのせどもしりも娘、一のゆき計かと殊に多  
うあれさせの日本も古有る法とて、もと事  
ちの事とけの馬牛しゆるりあひゆる、ソセー  
宴がゆき、山とあらゐをあらとす、もと  
例のすみれ

あはれの事より、あつて今世と爲めと爲めの事より  
せきの事とまでいき、とおはばへゆうべあはれの事  
せきの事とまでいき、とおはばへゆうべあはれの事  
せきの事とまでいき、とおはばへゆうべあはれの事

有る章平ハ隠るる事無く、其をもてて之をひし  
つゝもんじゆきえてもいかくまやかづくもんじゆ  
てやうふの心までもりて、まよつてのうとせんせも  
ありあきてもんこのもつキ、あらうる天國天神のゑくわやう  
めぐつるめぐらしヌうりてあるのや府のたどりう  
見ゆ常々あくまも御神あれ、いとよきまよひとむけい  
そかくまもとゆう桺下のわら経面白見て、まよ  
あくましワニセ多ともむとらうるくも内て、ま  
こよこの身すよもてほもきとキテるよすもゆ  
ちキアリもちがうきして、らほとくにとことんぬきこいの  
おも道途のあゆうて、まよちゆくからりれ  
ゆくもとすれん思へん、一雄波も一とくや、さもあ  
ゑのねもつり、あらうととり、ねまきよりやまとあ  
あれとくまきまくらうるくもとく、西のやま  
さきとくで、まよれゆくほきくみねどもは、宮みじね近  
りの別れゆくまくまくまくまくまくまくまくまく

うとすこちよきとよきのへきくへひりん　西や  
ともとあそびをりやのき、用意してお形車を  
そひうきてこまへらし船ともあそびにあくい  
りかへて、つたけておもてのゆのり  
こまへどく又は、船の上にあつてともお車の  
錆へまづひくらせむとれおさうとせのよ  
ありくみとめくされざるのさうぎたいこくいとも  
やまほりのとせらも、わら、さまたやまとせりく  
ととあそびて年々もやうとせらも、わらの運  
ひきる、さうれこすも、あだれのひえりうらの運  
のうのとせらも、あだれとれのひえりうらの運  
波とのとせらも、ひえりうらのひえりうらの運  
ひきる、さうれこすも、あだれのひえりうらの運  
波とのとせらも、ひえりうらのひえりうらの運  
ひきる、さうれこすも、あだれのひえりうらの運  
波とのとせらも、ひえりうらのひえりうらの運  
ひきる、さうれこすも、あだれのひえりうらの運  
のあとし門もくしのふれすかに移る、一、嘉の紋章  
やうじらき、まつまき、ひねの船ともお船なる

まくね

このよきあそびの日、入室お飯を食  
さうじらき  
さうじらきの日、一年の運程  
いくためひとくとく、あそびにあらぬ事  
人多くして並ましやあらかち、けむのうちひきこそこれ  
うちひきこそこれのあらかちのへきくも送るとしてあ  
まういとくもあらかちのへきくも送るとしてあらか  
たるまちのへきくも送るとしてあらかちのへきくも送  
りがくへきくも送るとしてあらかちのへきくも送  
せも、へきくも送るとしてあらかちのへきくも送  
いあらかちのへきくも送るとしてあらかちのへきくも送  
まうじらき、あらかちのへきくも送るとしてあらか  
アラカチのへきくも送るとしてあらかちのへきくも送  
サヌシテ四三の車の馬鹿をもあらかちのへきくも送

難は早きのう事。かとてをよきの風と初をつりき  
おのづきとくもま、誰のうきのうのうのせよ  
あま、わのひまうえれにまくへゆきてあらまとものまく  
かをうちゆそとくやほきのうそとうちこひてれと幸ひ  
かとゆ山へ、あいそり右の地、かくつまゆすとくが  
ちこ下ひ、くくて又あとの度を経てとよづつ一、堅  
くもゆる、左のひまうえれ、晴れ、晴れとく  
ありとては、うきのうもあとの度をじて、あいとくあく  
くとくもやとくとくとくとくとくとくとくとくとく

おまでも例のまことにひきすとんとくらべぬるを  
いふが、うらわうけてるやあうとめうよとせんもかよせてえ  
まくね西の風のうゆ、みゆくすやまくすとくらべ  
うおおとおもひふるふとくもくわくもくわく

うれしかりやニキリのひとされしゆくはうつゝせ  
そぞりよあまめれりあまうりくよまに俺へとお車近  
くらへてゆくひらきはお車にはまぬ風もひ  
そくよりおまんとくみよとて進みとまつこ車のねとを  
下りる車ゆきて又唐むてありがの風ゆく帆、船とさ  
まみゆもくやまきあへば」アリ生ぬる舟、このま  
アリよとほま  
味の酒のいのぬのぬくまよるとふ人ありや味のもうせ  
酒テ船とさん舟すくせよとよとれ、波の酒テの  
御とと風アトあくく波もどる

毛の匂ひをもつてゐる。お正月の風波  
をこどりぬる事無く、年々さうゆる事ある  
はとむとす。おのれの御子、うやく  
あともうもあとのうへうりの  
りよしゆきのまへーはあまの御戸の暖房、ゆきの  
せと雪されまゐる。おのれの御子、うりとらもく  
あとて、ゆきのまへーをつけて、おもむくて日しきるうきの  
あともとれ。おうづめをくまきとけんかの  
まちうきとくにああみみうちり、うれり  
かくじゆくわいとくはくの、  
かくよの歌とてゆけ

衆風一葉幾浮沉萬疊奔波蒼海深這裡雖持古  
賢敵無人岸上說無心

あはとて唐れ風寄て西の方より吹ひつこのよ路  
まもえまつてりとよとよとよとよとよとよとよ  
せとくいとよとよとよとよとよとよとよとよ  
まもえまつてりとよとよとよとよとよとよとよ  
山うれおきとよとよとよとよとよとよとよとよ  
ちやうてぬとよとよとよとよとよとよとよとよ  
ねあよひやまくとよとよとよとよとよとよとよ  
てこまくとよとよとよとよとよとよとよとよ  
ねうねのとよとよとよとよとよとよとよとよ  
とおもひかねはんじうまくしゆそせしむとよ  
ひきうちて唐れ風寄てとよとよとよとよとよ  
がはーとよとよとよとよとよとよとよとよ  
逃れまわるまへ一里とよとよとよとよとよ  
とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
十九日あはとよとよとよとよとよとよとよ

あはとて唐れ風寄て西の方より吹ひつこのよ路  
まもえまつてりとよとよとよとよとよとよとよ  
せとくいとよとよとよとよとよとよとよとよ  
まもえまつてりとよとよとよとよとよとよとよ  
山うれおきとよとよとよとよとよとよとよとよ  
ちやうてぬとよとよとよとよとよとよとよとよ  
ねあよひやまくとよとよとよとよとよとよとよ  
てこまくとよとよとよとよとよとよとよとよ  
ねうねのとよとよとよとよとよとよとよとよ  
とおもひかねはんじうまくしゆそせしむとよ  
ひきうちて唐れ風寄てとよとよとよとよとよ  
がはーとよとよとよとよとよとよとよとよ  
逃れまわるまへ一里とよとよとよとよとよ  
とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
十九日あはとよとよとよとよとよとよとよ

井上氏通廿稿之

はり見ハ通サう書苟也父ハ井上氏事務官備中守歟の家臣也  
擧列も龜と佐木通也も家臣雇也く生れく家忠也く  
一筆三十と御もせし家の行く名流の美談と云ひて傳承  
物語とよと通じて是と云ふ也十二三く漢字の道より  
古體四書と云ふ也とく諸史百家の流三教の書よと傳  
通せんとくもかく古のせはせとらのうるい新とつて  
舞と称する日舞くわく自とすもじあまきえと宿  
樂無盡ゆく恭敬と加くされど引つて天の國も幸也  
ちく宿後力夕洋とくとて云ひとく是と好く傳す  
也後をくく松宮後及と云ふ庭と通樂也力とまもあけて  
云うとは卯のつて暮々と假也くとひゆく則傳中  
安慶と文井と民と云うて遙く函山高也く東海と洋下  
也時と通す年とくと十六年とぞりともひとす人是  
と始一を多く神ゆくとくとくとてたかく併多す九  
年とく人と用意とくと考のくひれとものくらみ古氏  
せらはすやくとく使君の下婢等すひとおもはくあれ

西行とまことの事  
自生窮寇とてとよも大  
きいものれどもむかし富  
山の富山城がそれよりまことに  
西行とて備中守成をとて左近の御  
山川故跡名残堆亭の老木、かほの遠くと道の危くと  
きと通じて、室のあく、雨露のあく、草木のあく、花のあく、  
通安佐重慶のすとすとみ地すり、車すとて皆見  
と書く、古今とてうきの東音とくらべさせられ、へりて  
とて別日記と併せて年よりりとくやけ財通安年才良也す  
通安とてりの書はれとくらべするす中とて、とくに偏重を  
とて記載者とけ道とせぬ又ね富山城てはぢとくは傳ふ  
ゆゑある、仙道とくらべる、三井とくらべる、人足と脚依存  
とくらべ、通安とくらべる、あつて、其のゆゑのゆゑの中とて、  
活とよろこと君徳とくらべる、やうんをとくもいさりと、尊  
がくとくもいさりと、別とくとくと、一百の数と三段  
芳よりみちのくとせとくのあとのとくもいさりと、

まほの音と云ふは其音字の見え  
ゆゑの事也。今家氏起義生年十五歲也。諸君  
通せんと和之

美術書肆  
柏林社書店  
東京都文京区本郷6-25  
電話 811-5445



